

ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！ (31)

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide31/

——藁をもすがる・・・がん民間療法体験記——

作家がガンになって試みたこと

(高橋三千綱 著 1900円税別 岩波書店 2018年6月刊行)

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新の知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしています。査定歴21年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。今回のテーマは「がん民間療法」。

日本の民間保険会社の医療保険は、実際のところ日本の医療がほぼ100%公的医療保険による保険診療であることを前提に商品開発されています。皆さんも、医師や医療機関がやっていることには、「医学」の科学的裏付けや「医師」の良心という漠然とした根拠だけではなく、厚労省などの公的な権威による裏付けがあると思っているのではないのでしょうか。

ところが日本には「自由診療」というゾーンの医療があってそのゾーンが急拡大しています。そこで行われる医療は医療者と患者の間の契約関係だけで行われています。不妊治療や美容整形、レーシックなどなど。そして、最近世間を騒がすことが多いのが「がん民間療法」という自由診療です。川島なお美さんや、小林麻央さん、で話題になりました・・・。試みに「樹状細胞」や「リンパ球療法」や「免疫療法」で検索すると、いやいやただ単に「乳がん」と検索するだけでも、ずらずらと自由診療の医療機関が出てきます。ネット広告が「がん民間療法」の隆盛を招いているのかもしれないね。

ところが、その後当事者がお亡くなりになるからでしょうか、それら民間療法の実態はなかなかわかりません。しかし、さすが作家、高橋三千綱氏がリアルな闘病記を書いてくれました。さっそく読んでみました。

40年前に「九月の空」で芥川賞を受賞した高橋三千綱さんの闘病(?)記は「作家がガンになって試みたこと」。高橋氏はアルコール中毒で肝硬変、食道静脈瘤があるところに食道がん、胃がんと診断され・・・。まずは奥様が調べてきた「幹細胞療法」で450万円、次に、娘さんが調べてきた「樹状細胞ワクチン療法」に・・・とすすんだところでストップ。どちらもネット情報に誘われています。

高橋氏の結論はきっぱり、「もし、希望を抱いたまま痛みも苦しみもなく最後を迎えられるなら、民間療法も意味あるだろう。お金をむしり取られるのもまた患者の喜びであったかもしれない。しかし、民間療法はあまたあるが、私から見ればそこで救われる命はないのである。」・・・ここに至るまでの道もながかった・・・。

高橋氏が具体的に関わったのは「幹細胞療法」の〇〇フィールドクリニックと「樹状細胞



ワクチン療法」のセ〇ンクリニック。「幹細胞療法」には500万円近く払っている。日本では、「ガイドラインの標準治療」以外の独自の治療を、医師が独自の見解で自由診療としておこなうことに対してほとんど制約がない、ということ、この本を読んで理解してほしいです。（本の中ではクリニックは実名です）

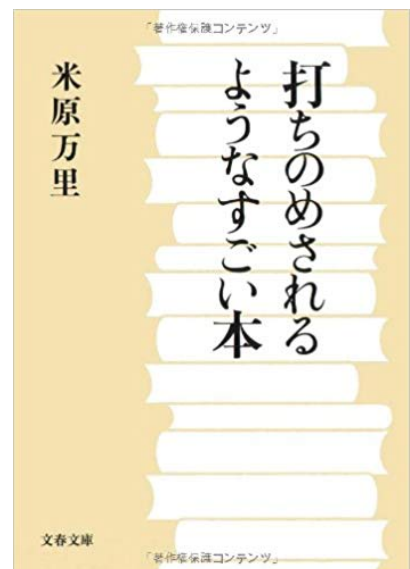
もしあなたが、がんと診断されて、自由診療のがん治療をすすめられるようなことがあったら、必ず、この高橋氏の体験記を読んで、よく考えて行動しましょう。これらのクリニック（検索すればすぐに出てきます）のHPを読み、そしてこの高橋氏の体験記を読めば、がん民間医療の真実が見えてくるはず。そういう意味では、クリニックの実名を挙げて糾弾しているとも言えますね。（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2018年10月）

関連本・サイトなど

打ちのめされるようなすごい本

（米原万里著 文春文庫 790円税別 2009年5月刊行）

ちょっと古い本ですがこちらは米原万里さんの書評集。ところが書評を読んでいくと次第に才媛米原万里のがん闘病記となり、ついには死に至る……。そして死を前にして、さまざまな怪しいがん治療本を読み、その書評も書き、実際にその治療法を受け続けた記録にもなっています。誰も「死」を直視できない……。です。



<追記>このブックガイドを仕上げたところで、『オブジーボの本庶先生がノーベル賞受賞』というニュースが！おめでとうございます！

ところがそれをきっかけに「あやしい免疫療法」もなんだか蠢（うごめ）いているようです。ブックガイドのテーマとリンクしてしますので、そんな記事も紹介しておきます。

<https://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20181003-00010000-bfj-soci>

<https://yomidr.yomiuri.co.jp/article/20160708-OYTET50011/>

ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！ (32)

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide32/

——多事争論・人口減少！？——

人口減少社会の未来学

(内田樹編 1600円税別 文藝春秋 2018年4月刊行)

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしております、査定歴21年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。今回のテーマは「人口減少」。

みなさん、評論家の内田樹（うちだ たつる）先生って知ってますか。語り口が好きな作家の一人で、彼の著した本を長年読んできました。偶然ですが、内田先生、某大学教授を定年退職し終の住処を建てたのですが、それがうちの近所ということまでびっくりしました。

さて、人口減少社会の未来について、いろいろな視点からの知見をまとめた本を編みたいという内田先生の呼びかけに10人の論客がさまざまな視点・立場から人口減少を論じたのが「人口減少社会の未来学」。内田先生をあわせた11人の言っていることはバラバラという印象ですが、それこそがこの人口減少という問題が一定の結論のない、未体験の出来事だということなのでしょうね。十人十色の文章を通して、新しい知見もえることもでき、またなにが論点になるのかもぼんやりと見えてきます。

例えば、少子化の原因は、既婚女性の出生数の減少ではなく、第一に晩婚化・未婚化であり、これは自由と発展の代償であること（平川）。また高齢化については実際の負担は高齢者の比率ではなく高齢者の実数の問題であること、つまり、実は高齢化率が高くて人口が少ない地方よりも、多数の団塊世代を抱えている都市においてこそ今後の高齢者の介護負担が問題になること（藻谷）。AIが単純労働を代替することにより頭脳資本主義の時代がくるが、日本では相変わらず無価値労働（労務管理や資料作り）に振り回されている労働者が多いこと（井上）。縮小社会肯定論を目にすることが増えてきましたが、イギリスの実例から、縮小社会はやはりキツイこと。また、国家財政においては家計とちがい節約・借金返済は負の効果が大きいこと（ブレイディみかこ）。1970年代の人口予測がもの見事に外れた結果が約半世紀を経た現在の人口構成であることを考えれば、いまから半世紀後の2070年の人口予測がどうなるかわからない（小田島）・・・などなど、根底の人口減少傾向の持続に疑問を呈するレベルの話から、リフレ擁護論、AI、都市と地方・・・と、論点はさまざま。それぞれの文章は面白いのですが、それだけ議論の方向もバラバラだということがよくわかります。AI論にも似てますね。



人口減少についての識者の間での合意レベルがその程度なんだということが見えてきて、このスピード感でしかすすまない事態はおそらく長いこと続くのだなあ、と納得。少子高齢化にそれほどの対策があるとも思えません。われわれがいまそういう道程の中にあり、いま何が議論されているかを知る、そういう意味では貴重な一冊になっています。

アンダーライティングにからめて言えば、人口減少は、保険加入者の減少・高齢化ということになるでしょうし、この先増えてくるであろう日本で働く外国人の保険加入ということにもなるでしょう。明治維新の時の人口が3500万、終戦時の人口が7500万だったことを考えると、人口急増の高度成長期こそが例外の時代だったということです。それは世界的にも同じ・・・そんな本も紹介しておきます。来るべき定常状態に備えねば・・・。（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2018年10月）

関連本・サイトなど

例外時代 高度成長はいかに特殊であったのか
（マルク・レヴィンソン著 みすず書房 3800円税別 2017年
11月刊行）



ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！ (33)

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide33/

——病理医あるある物語——

いち病理医の「リアル」

(市原 真著 丸善出版 2800円税別 2018年2月刊行)

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしております、査定歴21年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。今回のテーマは「病理医」。病理診断といえば支払査定では絶対のファイナル・アンサーとも言うべきものですが・・・さて、その診断をしている病理医ってどんな人？というわけです。

最近、自分よりもずいぶん若い医師が書いたものを読むことが増えました。単に自分が歳をとってそうなったということもありますが、若い世代の価値観が自分たちとは違ってきているというのがひしひしとわかるので、それが刺激的なこともあります。「いち病理医の『リアル』」を書いた市原先生は40歳前後、札幌厚生病院の「病理医」です。丸善出版から出ていて2800円もしますが医学書ではなく一般向けの内容です。医師ではないけれど病理診断と関わるような、たとえば保険の支払査定や引受査定で病理診断書を目にすることがあるという人にはおすすめです。本書前半で病理医の暮らしぶりがよくわかります。計画的にきちんと仕事されているなあ、というのが第一印象です。一方で、ツイッターとの関わりなどはけっこう濃くって、40歳くらいの医師のPCライフやネットライフが垣間見えます。

支払査定では「病理診断」の絶対性は相当強いと思うのですが病理診断にもグレーゾーンは結構あるんですよ。生き物の特徴は表現形がデジタルではなくアナログに変化することです。ここまで良性でここから悪性という境目は決定不能です。ですから病理医は「良性か悪性か病理学的に診断はつけられないけど、切除したほうがいい」と思った場合には「がんを強く疑う」と病理診断するわけです。またたとえば、臓器によっても表現を変えます。胃や大腸であれば手術もそれほど大変ではありませんから「癌を強く疑う」と書くのに躊躇しませんが、膵臓であれば自分の病理診断の結果が、かなり大掛かりな手術になるので癌をほめかすハードルは高くなり、「注意深い経過観察をお勧めします」あたりの表現になったりします。つまり、病理診断というものはそういう医療現場とのコミュニケーションの上で、時間の経過も織り込んで成り立つものだという事です。このことは本書の前半を読むと納得できます。

本書の後半は「AIによる病理診断」についてです。医療の中では病理診断と放射線科の画像診断がAIにとって代わられるのではとされています。生命保険のアンダーライティングにも通じる話ですね。話題のDeep Learningの本質にもかなりせまっています。Deep Learningは簡単にいえば「人間が判断の基準やアルゴリズムをこと細かに教え込まなくても、事例のデータ（たとえば大量のネコの写真データと「これはネコ」という判断）を膨大



な数AIに投入すれば、勝手に特徴をつかんで学習する」ということです。つまり、胃がんなら胃がんの検体を大量にAIに学習させれば、そこに含まれている複合的な情報を用いて、AIが勝手に「胃がんとはこういうものだな」と判断してくれるのです。

それでは、病理診断医（もアンダーライターも査定医も）って将来なくなっちゃうのか、という最後の部分までには本書は踏み込んでいませんが、病理診断業務メインから、「コミュニケーション+研究者」業務へのシフトは示唆されています。まあ妥当なところかも。この本のおかげでDeep Learningについてはもうちょっと勉強しなくてはと痛感しました。世の中すべて加速をつけて変化していますね。加速をつけた適応力というのが人間にも求められるのでしょうか。せわしないと・・・思うのは・・・歳のせい？（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2018年11月）

関連本・サイトなど

フラジャイル 病理医岸京一郎の所見

（草水敏・恵三朗著 アフタヌーン・コミックス 各600円税別 講談社）

病理医がヒーローという異色の漫画「フラジャイル 病理医岸京一郎の所見」、結構面白いです。アニメにもなりました。最新号は第12巻。



ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！ (34)

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide34/

——抗生物質ハンター大村智先生の骨太人生——

世界を救った日本の薬

画期的新薬はいかにして生まれたのか

(塚崎 朝子著 講談社ブルーバックス 1080円税別 2018年3月刊行)

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしております、査定歴21年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。今回のテーマは「日本発の新薬」。

製薬メーカーが引き起こした事件を何度か取り上げましたが、もちろん製薬そのものは社会にとって大切なもの。日本人研究者が開発した薬が世界的にヒットした例もたくさんあります。今回ガイドする「世界を救った日本の薬」では15人の研究者をとりあげ、それぞれの画期的新薬開発までの道筋をコンパクトにまとめてくれています。おりしも、オブジーボの本庶先生が2018年のノーベル賞を受賞されることになりました。オブジーボのことは何度か紹介したので、今回は「日本人が開発し人類に貢献した薬ベスト1」と言われ、2015年にノーベル賞を受賞した大村 智先生が発見した「イベルメクチン」を中心に上げます。そうはいうものの、わたしは不勉強ながら「イベルメクチン」をノーベル賞受賞まで知りませんでした。一緒に勉強しておきましょう。

大村先生がイベルメクチンの前段階で発見したのは家畜用のエバーメクチン、家畜の腸管寄生虫のうち線虫類に効果が大きくほぼ100%駆除することができます。伊東の川奈ゴルフ場近くの土壌の中からみつかったそうです。その誘導体のイベルメクチンは1981年に製品化されました。家畜の腸内の寄生虫を駆除することで飼料効率が大幅にアップ（つまり、家畜がよく太る）します。その後、この薬は馬の寄生虫オンコセルカに感受性をしめしたことから近縁のヒトのオンコセルカ症にも効くことがわかりました。オンコセルカ症（河川盲目症）というのは熱帯の風土病で、死にはしないけれど失明する病気です。イベルメクチン以前には毎年1800万人が感染し77万人が失明していたそうです。イベルメクチンはメルク社・WHOのプロジェクトとして世界中で3億人に無償で投与されており、2025年にはこの世からオンコセルカ症が撲滅される予定だそうです。

大村先生の略歴を転載しますと「大村智 北里大学名誉教授。1935年山梨県生まれ。山梨大学学芸学部自然科学科卒業後、都立墨田工業高校定時制の教員をしながら東京理科大学大学院理学研究科修士課程を5年間で修了。その後、山梨大学工学部発酵生産学科（当時）の助手に採用され、1965年に社団法人北里研究所に入所。土壌に含まれる有用微生物から抗生物質を始めとする生理活性有機化合物を見出す新規探索系を確立し500種あまりの新規物質を発



見した。」少し噛み砕くと、山梨の農家の生まれでわたしの父と同じ年（昭和10年生まれ）ですね。山梨で農業→醸造化学→生物有用物質化学→構造決定→抗生物質ハンターと苦労しながら歩を進め、ついには北里研究所のトップに。

イベルメクチンはWHOプロジェクトの分は無償ですが世界中で家畜に使われるなどベストセラー&ロングセラーとなり発見者対価(20%)はこれまで200億円以上。その9割を北里研究所のために使い財政難だった研究所を再建し北里大学の分院（埼玉県北本市）をも開院しました。ちなみに残りの20億円は共同研究者に10億円そして残りが自分（とはいっても10億円・・・！やはり薬というのは当たったらすごいんですね）。

こんな感じで15人の研究者の事跡をたどることができるとともに、それぞれの先生への直接インタビューも収録されていて、それぞれの先生を身近に感じることができました。もちろん本庶佑先生をはじめとする「がん」に対する抗体医薬開発についても。またカナグリフロジン（SGLT2阻害薬）も日本人（野村純宏先生 田辺三菱製薬・北大薬学部出身）の発明なんですね。

仕事から薬のことは詳しいつもりでも、その薬がいかにして発見されたかはなかなか知る機会がありませんでしたが、本書で大村先生はじめみなさんの地道だけれど骨太の人生にふれることができました。この先、ノーベル賞の授賞式シーズンです。本庶先生の受賞をきっかけに手に取ってみるには最適の一冊でもあります。（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2018年11月）

ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（35）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide35/

——相関関係≠因果関係——

データ分析の力 因果関係に迫る思考法

伊藤 公一朗著 光文社新書 780円税別 2017年4月刊行)

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしております、査定歴21年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。今回のテーマは「データ分析と因果関係」。

「ビッグデータ+人間の判断力=真実が明らかに！」と帯に書かれています。光文社新書にはめずらしい(?)地味なタイトル「データ分析の力」ですが、データをどう仕事に活かすかをじっくりわからせてくれる良書です。1年で10刷ですから売られています。データ分析して査定基準を考えるような仕事をしているひとには役に立つ一冊です。

医療の世界ではここ20年ばかり根拠にもとづいた医療EBM (=Evidence Based Medicine) が声高にいわれてきました。最近ではそれが次第に過剰になって患者不在のガイドライン医療化しているという批判もあります。しかし、政治・経済の分野では、いまだに政界長老や経営陣の「経験や勘や力関係」でものごとが決まることが多いのではないのでしょうか。これってまさにEBM以前の医療と同じ状態ですよ、医療は自己改革してきたとも言えます。

そこで、政策や企業の運営方針もデータをもとに決めていこう、といういわばEvidence Based な考え方が出てくるのも当然です。そのEvidenceを解釈する際に、大きな問題となってくるのが「相関関係を因果関係と勘違いしてしまう」というパターン。例えば、喫煙者には肝機能異常者が多い(=相関関係がある)、よってタバコは肝臓に良くない、というギャグみたいな考え方をする人はまだまだいます(真実は、タバコを吸う人は酒も飲む)。実際の企業の現場では、「去年の夏はテレビCMでアイスの売上げが伸びたから今年もやろう」という一見正論っぽい話(実は猛暑だっただけとか)が相関関係と因果関係をゴチャゴチャにしており、その違いをきちんと理解できないままの意思決定って世の中に多いんです。

そこで、相関関係ではなく因果関係を証明するにはどうすればいいのかというのが本書のテーマになります。本書からわかりやすい例をあげますと、オバマ前大統領が選挙戦用のホームページデザインを決定するに際し、何パターンか作ってネットでの訪問者に各パターンをランダムに割り振り、どのパターンがもっとも寄付につながるのかという実証分析の結果を経てデザインを選択したというのが典型的です。これって医療の分野では当たり前のように使われているRCT (=Randomized Controlled Trial: ランダム化比較試験) ですがそれが社会科学でも使われるようになったというわけです。



しかし医療とちがって実際の社会現象をRCTすることは多くの場合不可能です。そこで登場するのがRCTの代わりとなりえる種々の方法。本書でとりあげているのは「境界線を賢く使うRDデザイン」「階段状の変化を賢く使う集積分析」「複数期間のデータを生かすパネル・データ分析」。

例えばRDデザインでは、保険会社が血圧の査定基準を開示し、なおかつ告知の血圧値を信用して査定していると、条件体になる血圧値境界の直前の血圧の告知が不自然に増加する・・・なんてありそうですよね。そこから美化告知の存在を証明する・・・という具合に使えるのかなと感じます。

それ以外にも、医療と社会科学の中間に位置する保険医学にとっては膝を打つ内容の多い本書、分野としては「計量経済学」らしいのですが、経済学もあなどれません。また、新書とは思えない懇切丁寧さできちんとしていてわかりやすい良書。おすすめです。（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2018年12月）

関連本・サイトなど

「原因と結果」の経済学 データから真実を見抜く思考法

（中室牧子・津川友介 ダイヤモンド社 1600円税別 2017年2月刊行）



ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！ (36)

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide36/

——語りつくしてくれて、ありがとう——

遅刻してくれて、ありがとう (上・下)

(T・フリードマン著 日本経済新聞出版社 各1800円税別
2018年4月刊行)

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしてます、査定歴21年の自称査定職人ドクター・ホンタナ (ペンネーム) です。さて年末です。平成も残り1年をきりました。今回は医学を離れて平成の30年間で「世界の視点」で振り返るのに最適な本をレビューしてみました。

平成は西暦では1989年から2019年。国内的にはいろいろありました、バブル崩壊・55年体制崩壊・小選挙区制・阪神淡路・サリン・銀行生保破綻・郵政民営化・東日本大震災・原発事故……。平成の終わりということであつた国内に目がいきますが、じつはこの30年間は世界史的にもまさにターニング・ポイントでした。平成になつたまさにその年にベルリンの壁が壊れ・ドイツ再統一・EU発足・湾岸戦争・911……。と続きます。それならば、まずは世界におけるこの30年を振り返りたい。それにぴったりなのが本書です。

フリードマンと言えば「レクサスとオリーブの木」(2000)で1990年前後のグローバル化の時代を描き、「フラット化する世界」(2008)でインターネットとグローバル化の時代を描いてベストセラーを連発。彼の最新作がこの「遅刻してくれてありがとう」です。サブタイトルは「加速の時代を楽観的に生きる方法」。「フラット化した世界」に引き続く2007年から今までを「加速の時代」ととらえ語り尽くしてくれます。「遅刻してくれてありがとう」というのは、加速の時代にせわしなく生きている中で、相手が遅刻してくれてできたようなポカンとあいた時間こそ立ち止まって考えることができる……。ことに感謝という意味です。

2007年はiPhoneが発表された年なんですね。それから10年でスマホは世界を席卷してしまい、印刷術やラジオやテレビに匹敵する人類のレガシーになりました。さらに、フェイス・ブックやインスタにビットコインなどのネット上でのサービスがスマホの世界拡散とあい



まってこの10年で世界はすっかり変わってしまいました。いや、完了形ではなく、今もどんどん変わっていています。日本でもZOZOやメルカリなどIT長者を生み出す企業が続出しています。

変化の速度が加速したこともまたこの10年の間におこったことです。こうして本を読んでブックレビューを書いている間にもすぐにその本が陳腐化するようなことがおこっています。変化が加速しているために個々人が変化全体を捉えきれなくなっており、それがデジタル・ストレスになっているとも言えます。本書はこうした現象を800ページにわたって網羅。まるで未来から現在をみて書かれた歴史書のようにもあります。

「レクサスとオリーブの木」「フラット化する世界」「遅刻してくれてありがとう」、この三部作それぞれ10年ずつで合わせてぴったり平成の30年間とシンクロしています。平成時代を世界の動きの中で考えてみるのに、日本にとらわれていないフリードマン三部作はうってつけです。まずは、最新刊の「遅刻してくれてありがとう」から手に取ってみてはいかがでしょうか。

じゃあ日本の内側のことはどうなんだ？という方には「平成の重大事件」が手軽でオススメです。自然災害と落ち着きのない政治に翻弄された平成という時代を、常に最前線にいた(?)猪瀬直樹氏と田原総一郎氏が語りつくします。「朝まで生テレビ」「サンデープロジェクト」ってこんなに政治に影響あたえてきたんだ・・・と驚きました。天災の多い日本では、どうせ大災害でガラガラポンになるのだから・・・という、なんとなく無責任な「天災史観」があるという話も納得。

明るいことばかりだったとは言えない「平成」ですが、新年からは前向きなブックガイドにご期待ください。それではみなさん良いお年を。(査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2018年12月)

〈参考図書〉

平成の重大事件 日本はどこで失敗したのか

(猪瀬直樹・田原総一朗著 朝日新書 760円
税別 2018年6月刊行)



ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！ (37)

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide37/

——この先の、あなたの20年は？——

未来の稼ぎ方 ビジネス年表2019-2038

(坂口 孝則著 幻冬舎新書 980円税別 2018年9月刊行)

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしてます、査定歴21年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。今回もアンダーライティングそのものからは若干はずれますが、新年、そしてもうすぐ元号も新しくなるということで、「未来論」を取り上げてみます。

「未来論」といえば、昨年の出版界では「未来の年表」や「ホモ・デウス」が売れました。読んでみましたが、個人ではどうもしようがない予測で不安を煽るだけだったり、あまりにも先の話でどうもリアリティがない。「だから、どうしろっていの！」という感じでした。

そこで、もっと具体的な、すぐこの先の自分に役立つ本はないのか・・・、ありました。この先の20年を「稼ぐ」という切り口で読み解く本書、「未来の稼ぎ方 ビジネス年表2019-2038」です。2019年から1年ごとにテーマを掲げて、データなどからその年に起こることを分析し、それにもなって生まれるビジネスチャンスは何か、だめになるビジネスは何かという形式で20年分、かなり具体的で面白いです（年号は必ずしも中身とシンクロしてるわけではなさそうです）。

ちなみに2019年のテーマはコンビニ業界。2019年沖縄にセブンイレブンが出店し全都道府県三大コンビニが1店もないところはなくなるらしいです。一方で飽和状態でもあるわけで、地方における買い物弱者へのデリバリーサービスなどがビジネスチャンス、いわば「新しい御用聞き」への変貌が必要だと、なるほど、わかるわかる。

こんな感じで、2020年は自動運転車が一部実用化というテーマから、自動車産業の未来像。2021年はインフラ老朽化（橋や高速道路などなど）の改修需要による震災後需要が減ってくる地元建設業者のビジネスチャンス。2024年アフリカ（ルワンダ？）で富裕層が急増、いよいよ保険会社もアフリカ進出でしょうか？2025年団塊世代が75歳でシニアこそが最大の消費者へ。2029年中国人口のピークアウトをうけて日本の少子高齢化対策ビジネスの輸出。2032年インドのGDPが日本越えから、インドで今がんばる日本企業（スズキ、コクヨ、ユニ・チャームなど）のビジネスモデル分析。あとはおもしろそうなタイトルだけになります・・・2034年「AIが大半の仕事を軽減化、あるいは奪う」、2036年「老年人口が3分の1、死者数も最大に。」2037年「トヨタ自動車が100周年」と続きます。



人生100年時代ですが、トヨタや大手生保などのような100年企業が存在する一方で、会社の平均寿命は10年くらいだそうです。「人生100年、会社10年」ですから、一つの職業で一生食べていくことはかなり難しい未来。そんな世界を俯瞰し、これから伸びそうな分野、縮みそうな分野を見極めて自分なりの見取り図と戦略を描くこと、さらに複数のプロフェッショナル分野を構築すること、などなど若い人にこそピッタリのアドバイスが満載です。参考文献もきっちりつけてありタイトルから受ける印象よりもずっとしっかりした一冊でした。

本書の著者は40歳、ゆえに前向きです。やはり未来論は、その未来を当事者として生きていく人こそが語るべきだということがよくわかります。60歳前後の人が書くものは、わたし自身も含めて、自分にはもう関係ないけど・・・という態度が見え隠れすることが多いですね。ああ、本を読んでも世代交代を感じるこの頃。とはいえ、老け込むことなく、今年もアンダーライティングの今を探るために役立つブックガイドを続けていきたいと思っています。よろしくお願いします。（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2019年1月）

ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！ (38)

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide38/

——骨髄移植で統合失調症が治った！——

神経免疫学革命

脳医療の知られざる最前線

(M・シュワルツ他著 早川書房 2300円税別 2018年3月刊行)

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしてます、査定歴21年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。今回のテーマは「精神疾患と免疫反応」。

21世紀になったころまでは、中枢神経系には血液脳関門（BBB）があり細胞性免疫から隔離されているのだから、外傷や疾患によるBBBの破綻から進入してきた免疫細胞が引き起こす炎症反応は脳にとっては本来必要のないものという考えがありました。

わたし自身も、脳の働きは神経細胞（ニューロン）のネットワークとそこを流れる信号がメインで、それを支える血管や脳脊髄液などはまさに支えるだけの存在にすぎない、言い換えれば、中枢神経系は、体からは酸素や栄養の供給というかたちで支えられてはいるものの、免疫とはあまり関係ないんだろうな・・ぐらいの認識でした。

ところが、昨年1月にブックガイドした「8年越しの花嫁」で「抗NMDA受容体脳炎」では、卵巣の奇形腫成分に対する自己抗体が脳のニューロンのNMDA受容体を攻撃することが原因だと知り脳もまた全身の免疫系に組み込まれていると知り驚きでした。そうこうしているうちに神経免疫学Neuroimmunologyという用語も耳にするようになり、たとえば「ADHDが妊娠期のウイルス感染などで母体の免疫機能が活性化し炎症性サイトカインの発現亢進が胎児の脳形成に影響を及ぼしていることが原因ではないか」などという論文も現れるなど、この分野も要注目だと思い始めていたところに、この分野の創始者の一人、シュワルツ教授の一般向け解説書である「神経免疫学革命」が出版されました。

読んでみると、①「免疫系」と「精神」というまったく別物だと思われていたものが、実は協調して脳健康を守っているということ、②アルツハイマー病になると脳の脈絡叢が機能の一部を失い適切な免疫細胞を脳に送り込めなくなること、③脈絡叢は脳と免疫系が接するインターフェイスであり免疫細胞にとっては中枢神経系への入り口であること（＝脈絡叢は離れたところから脳に影響を及ぼす免疫細胞が境界パトロールをするための遠隔プラットフォーム）などなど、新知見にあふれています。



一方で、本書はやや難解・冗長なところもあり紹介をためらっていたのですが、最近の医事新報（No.4942 2019年1月12日号）の特集が「精神疾患と神経炎症の関係」であり、まさに神経免疫学そのもの。ぼやぼやしていると現実が書物を追い越しそう！

この医事新報の特集で興味深いのが「白血病になった統合失調症患者が骨髄移植を受けたところ、なんと統合失調症が治癒した」という症例報告です。まさに免疫変容で統合失調症が治るということではないですか。その他、認知症やうつ病における神経炎症とミクログリアの活性化の関係・・・と話はどんどんと展開していきます。

というわけで、医学の先端部分ではすでにこの本を追い越しているようなところもありますが、神経免疫学という新しい分野を拓いたことに敬意を表して、まずはシュワルツ先生のこの本を読んでおくことをおすすめします。（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2019年1月）

<関連サイトなど>

[日本医事新報「精神疾患と神経炎症の関係」](#)

[島根大学医学部精神医学講座のHPから「統合失調症の臨床研究」](#)

ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！ (39)

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide39/

——こんなに面白い発生学があるとは！——

人体はこうしてつくられる

ひとつの細胞から始まったわたしたち

(ジェイミー・A.デイヴィス著 紀伊国屋書店 2500円税別
2018年11月刊行)

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしてます、査定歴21年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。今回のテーマは「発生学」。カバーの絵が不気味ですが、これは日本語版専用らしく内容とはほとんど関係ありません。ちょっととっつきにくそうですが、すばらしい本でした。



受精卵から人間ができる、われわれすべてが母親の体内で経験してきたこの発生の不思議がすっきりとわかります。その不思議で複雑なステップは、たぶん、あなたが想像しているものとはかなり違います。本書を最後まで読みとおしたとき、その不思議で緻密なメカニズムの結果として自分が存在していること、そしてその自分が、そのメカニズムが書かれた本を読んで「なるほど・・・」と考えていることの驚異に感動を覚えるほどです。

ビルを建てるのに設計図があって、その設計図にしたがって材料を準備し組み上げていく、それを人体にあてはめ、DNAが設計図で、その設計図にあわせて必要な物質が必要な場所で作られる・・・そんなふうには思っていないませんか。でもそれでは説明できないことばかりです。たった一つの細胞から始まって、最終的に兆の単位まで増えるヒト細胞のどれ一つとして「人体の完成形はこうです」という全体像を知っているわけではないですし、どこか外部から指示がくるわけでもありません。では、どうやって？それこそがこの本一冊で書かれていることなので、短くまとめるのは無理そう。

さわりだけ書きますと・・・受精卵が細胞分裂（卵割）を繰り返す中で、2個4個8個へという分裂の初期段階はすべての細胞が表面の一部が外界に接しています。ところが16個あるいは32個くらいまで分裂すると一部の細胞は他の細胞に周りを覆われてしまい外界に接することができなくなります。この外界に接していないということを細胞は感知します。自分が他の細胞に完全に囲まれているのか、あるいは一部が外側の体液に接しているのかを識別し、その情報を使って次に何をすることが決まります。自分が自由表面をもつという刺激が細胞表面から核につたえられ、それが一連の遺伝子のスイッチをオン（＝遺伝子の発現を活性化し）、それらの細胞は栄養外胚葉（胎盤を作るもとになる）になります。一方、自由表面を持たない細胞は内部細胞塊と呼ばれこちらはスイッチをオンにしません。・・・

このように「直前のある状況」を感知し、それによって次に何をするか（どの遺伝子の発現を活性化するか）が決まる。すべてがこの仕組みの緻密な繰り返しです。「直前の状況」とは多くの場合、特定の遺伝子の発現により合成されたタンパク質の濃度勾配や、あるいは細胞そのものへのそれら濃度勾配を感知できるレセプターの出現です。

ベルトコンベアで自動車を作る作業に近い部分もありますね。細分化されたそれぞれの工程はそれが何の役にたつかわからないけど最後には自動車ができるような。ちがうのは、受精卵はすべての工程の作業員であるだけでなく、同時にできあがっていく自動車でもあるということです。そして分裂・分化しながら、決して最終形がわかっていないのに、それぞれの流れ作業を続けて、自分自身も変化していき最後にはヒトになる。

なんだか私のまとめでは、わかったような、わからないような感じですが、本書を読むとかなりの部分が明快にわかります。そしてわかっていくことが楽しいです。まるで自分が受精卵から胎児になっていくかのように読み進められます。それに、ところどころ引用されている警句やその解説はウイットにあふれていて楽しい。

昭和の時代に医学部を卒業して以来、自分がある程度興味を持続している内科・外科・病理・遺伝子などはそれなりにアップデートしてきたつもりでしたが、今回この本で発生学の「今」を知ることができてよかった。カバーが不気味、高価、重い・・・いろいろありますが挑戦する価値の高い名著です。（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2019年2月）

ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（40）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide40/

——いくらでも恣意的に？それで診断基準！——

大人の発達障害ってそういうことだったのか その後
(宮岡 等・内山 登紀夫著 医学書院 3000円税別 2018年6月刊行)

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしてます、査定歴21年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。今回のテーマは「大人の発達障害」。

きちんとした職業についている大人が「発達障害で投薬受けている」という告知をしているのにとときどき遭遇します。あるいは、電車のステッカー広告では社会保険労務士事務所が「障害者の復職支援、障害年金の相談うけたまわります」という広告を出し、その中に、「発達障害で障害年金〇〇〇万円」なんて書かれています。発達障害ブーム？いったいどういうことなんでしょうか。本書は、医学書院からの刊行なので一般書とは言い切れないかもしれませんがそんなに高価でもなく、難解でもなく、だれが読んでも書いてあることはよくわかります。むしろ精神科医の本音がみえてくるような本でした。

大学の精神科教授と「よこはま発達クリニック」の院長の対談で構成されています。「おとなの発達障害とはどういうものなのか」語りつくしてくれると思ったのですが・・・結果、よくわかりませんでした・・・というのも、本書の中で何度も発言されている「診断基準がいくらでも恣意的に解釈できるので大人の発達障害は精神科医の間での診断が一致しない」という恐ろしい事実があるからです。この方面の権威である二人がそう発言しているということから感じるのは「結局、精神科ってそういうところだったのね」という思いです。そのあいまいな診断を根拠にして、ストラテラ、コンサータ、インチュニブといった薬剤が使われているんです。大丈夫ですか？

さらには、あいまいな診断を根拠にして会社を休む、障害年金をもらうなどいわゆる疾病利得が発生し、患者はその利得の中に浸っていくこととなります。さらにさらに、そのあいまいな診断を根拠に、子どもであればデイケア、大人であればリワークをやりますよ、という介護系事業者が補助金という利益をもとめて大量に参入してきています。

内科や外科や病理にも同じようにグレーゾーンはありますが、そこは病気が目に見えるものなのでグレーなりに合理的に処理されています。ところが、病気が目に見えない精神科ではそのグレーの切り分け具合で、医療者も患者も業者も薬剤メーカーも利得を得ているわけです。そりゃあ発達障害と診断される大人が増えるはずですよ。さらには、タイトルに「発達障害」と入れると売れるというわけで一般書でも発達障害本ブームです（著者らは出版バイアスと呼んでいます）。



また、最近の現象として定年して家に居続けるようになり夫と向き合うことが多くなった妻がなにも自分ではできない夫に「あなた発達障害じゃないの、病院行ってみたら」なんて言うらしいです（笑えません・・・）。あるいは、親と暮らすことでなりたっていた中高年の発達障害者が親の死後途方にくれる・・・などなど、この本、周辺のネタはけっこう面白いのですが、結論は「いい医師を選んでください」ですって。うーん、そりゃそうなんですが、それが見分けられれば、というか、どんな医師がいい精神科医なのか教えてください！

同時期に刊行された一般向けの新書「『発達障害』と言いたがる人たち」のほうは発達障害ブームをうまく捉えてはいますが、真に苦しんでいる患者さんには不親切。精神科領域では、診断基準がはっきりしないまま、それを取り巻く社会はふりまわされる。よくあることではありますが・・・。（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2019年2月）

関連本・サイトなど

「発達障害」と言いたがる人たち
（香山リカ著 SB新書 800円税別 2018年6月刊行）

